



vol.2 モノとカラー

順位	氏名	合計ポイント
1	綿貫 正義	574
2	江成 公隆	552
3	霜田 茂	494
4	綿貫 朋子	407
5	野口 靖	389
6	山上 健太	383
7	橋立 久志	346
8	上田 靖彦	340
9	香取 まったか	324
10	伊藤 泡舟	306
11	廣部 良治	287
12	飯塚 政美	243
13	ジャンピエール杉浦	233
14	倉持 昌貴	231
15	諸☆ 敏行	228
16	平山 敏郎	221
17	天笠 充	
18	福田 俊	

今日の日曜日に備え、ナリーズ2014暫定順位をプリントしてみた。6月までの、ちょうど半年ぶん。ゲストもヒカキン（非皆勤者）もごったのリストだが、面白いことが分かる。

以前Facebookで書いたと思うけど、昨年年間チャンプ綿貫さんの総得点は855ポイント。2回流会でトータル9回の競技会。参加点は20。つまり、ナリーズは毎月75点の釣りで年間を獲れることになる。月例会優勝者の3/4の釣果で充分ということだ。

で、今年はどうなっているかというと、

$$(574 \div 6) - 20 = 75.666666\dots$$

前年を0.6上回っているに過ぎない。鳥肌が立つほどの

ピタリ賞。企業の業績としてみれば、されど0.6であり、たった0.6ではないのかもしれないが、とにかく綿貫さんは今年も順調そのものと言える。

この75点は、クラブのレベルによっては差があるかもしれないし、実は差が無いかもしれない。これは是非、読者の皆さんからのデータを期待したいところ。総重量制で年間を争うクラブだと比較しづらいが、百分率に置き換えていただければ、だいたいの目安は分かる。

一発大逆転の有無で語られる点数制と総重量制の差だが、僕は両方を経験してきてみて、どちらも結局はカタク釣る奴には敵わないと感じているし、リキまずにハマった結果が平均点以上という釣りもあってはじめて、平均点になるとも思っている。なので、100点は狙わなくて良いとしても、毎回その75点を狙っていて良いものかどうかとも難しい問題。

猛者が多く、たった一度の取りこぼしが大きく響くクラブなら、75点ではなく85点になるかもしれない。しかし、本当にそうだろうかと思う僕も居る。なぜなら、



「本来魚釣りは対サカナであって、対ヒトではない」

強いて言えば、他人では無く自分との戦い。であるならば、周囲に気を取られることなく、ハデな成績を残す必要もなく、「ある平均得点」を目指すスポーツとして楽しむ人が居ても良い。メンタルが大きく作用する「個人スポーツ」であるなら、クラブのレベルにかかわらず、ある一定の数値になるのではないか？

それが今日の僕の仮説だ。

インストラクターだろうがフィールドテスターだろうが何だろうが、人間。誰もがボケるし、コケる。悩みながらもがき、脱出出来る日もあれば出来ない日もある。プライドが邪魔をし、釣れない自分を認められず、歩き出したい衝動に駆られることもあるだろう。本気なんて出していない、隣のコーチに忙しかった、場所を外した、そんな言い訳をしたい日もあるだろう。

でも、ナリーズの綿貫さんは言わない。いつも真剣にやっていると言う。このカッコ良さは、是非多くの方に理解していただきたいなと思うんだよね。友人として。もし、マジボケしてても誰も気付かない。どうせ手を抜いてるんでしょって、周りが思ってくれる。そういう人徳ってのは、ちょっとやさっとじゃ築けない。

ヘラブナ釣りの楽しみ方は人それぞれ。カッコ良さについても、アピール方法、その受け止め方、やはり人それぞれ。上手さの解釈さえも。

太陽のようなスターも居れば、月も居る。派手な活躍で、若い人の憧れになるのも大事なこと。でも、一見地味な活動の中に、人としても、釣りの内容そのものにしても、深く重い意味があることを見落としてはならない。僕はそう思う。

ちょっと内輪ネタへ脱線しました。お許しを。

2014.7.3 江成 公隆

